

カキにおけるフジコナカイガラムシの発生増加の原因と防除法

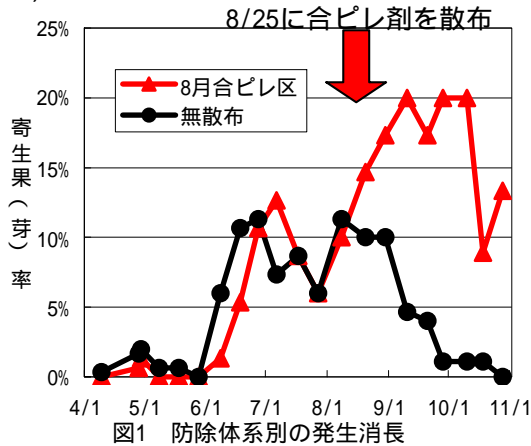
フジコナカイガラムシはカキ栽培における重要害虫であるが、近年多発園が増加傾向にある。そのため、多発化の原因究明と防除対策についての研究を平成 17 年度から 3 ヶ年行った。



写真 1 フジコナカイガラムシ寄生果

1、多発化の原因究明

天敵に悪影響を及ぼす薬剤の使用: 8月にカメムシ防除によく使用される合成ピレスロイド剤を散布すると、本種の寄生果率が無防除の場合よりも増加した。このため、カメムシに対する薬剤の多用が天敵に悪影響を与え、本種多発化を引き起こす原因の一つと考えられた(図 1)。



薬剤散布方法の変化: 現地のスピードスプレー(以下 SS)防除園で防除効果を検討したところ、SS防除自体は効果が高いが、恒常的にSSの死角になる樹がある場合、それが本種の発生源となり園全体の密度を増加させていると考えられた(表 1)。

表 1 SSでの散布状況別の防除効果

調査区	SSでの散布状況	6月4日		9月18日	
		100果 当虫数	寄生果 率(%)	100果 当虫数	寄生果 率(%)
区1	両側から散布	0.3	0.3	13.3	12.0
区2	両側から散布 (片側のみ散布区の隣)	0.3	0.3	56.0	28.0
区3-1	片側からのみ散布 散布側	0.7	0.7	93.3	37.3
区3-2	片側からのみ散布 死角側	3.3	2.0	297.3	84.0

発生消長の変動は無し: 年間の発生消長と越冬時の生態について調査した結果、発生の早期化や年間発生回数の増加などはみられず、従来の知見と変化がなかった。

2、防除対策

有効な防除薬剤: 有機リン系のスプラサイド水和剤・トクチオン水和剤・サイアノックス水和剤、カーバメート系のオリオン水和剤 40、ネオニコチノイド系のモスピラン水溶剤・スタークル/アルバリン顆粒水溶剤は、ふ化幼虫に対して十分な即効的殺虫効果が認められる。また、アブロード水和剤も遅効的に高い殺虫効果が認められる。

薬剤防除上の注意: カメムシ等の防除に用いられる合成ピレスロイド剤は、本種に対して殺虫効果が低く、逆に天敵には悪影響が強いと考えられるため、本種の発生園でカメムシの防除を行う場合は、ネオニコチノイド系の殺虫剤を使用する。

散布方法の改善: SSの走行進路の改善や、薬剤のかかりやすい樹形に改造することで、防除効果が向上する。

粗皮削りの励行: 本種は幹および枝の樹皮下で多く越冬しており、冬季の粗皮削りは高い防除効果が得られるため、多発園では可能な限り実施する(図 2)。

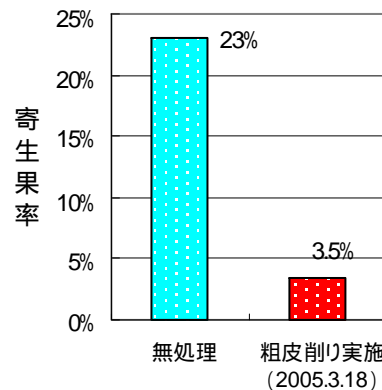


図 2 粗皮削りの防除効果(7/15調査)



写真 2 高水圧を利用した粗皮削り

(虫害班 研究員 宮下裕司)